

# 終戦記念日に思う 若者の命とワクチン接種順位

伊藤 澄夫 伊藤製作所社長  
中京大学特別栄誉客員教授

夏休みにズボラをしたため、この原稿を書き始めた本日は終戦記念日だ。かつて盆休みに連続した雨の日は無かった。夏場の雨といえば、せいぜい夕立くらいのものであったが（1975年には2度の台風が来て4日間雨の年はあったが）、今年はさらに連続10日以上も雨天が続くとの予報が出ている。まさに近年の異常気象を表した夏であり、今後の自然災害を心配するのは私だけではあるまい。

### 命の優先順位

一昨年初、鹿児島県知覧の陸軍特別攻撃隊基地を訪問した。私より僅か16、7歳年配の先人が、命を懸けて国のために戦った記念館を見学して身が引き締まった。

私は40代のころ、海軍の撃墜王であった坂井三郎氏の影響を受けて軽飛行機操縦にはまっていた。飛行機好きの私が終戦前に20歳前後であつたら、多分いま、この世にはいなかったらう。

若い隊員の出撃前に書いた遺書には両親や兄弟、恋人にあてたものであつたが、最も多かったのは母

親へのものだった。死を直前にした若者が、自分を生み育ててくれた母親を誰よりも想うのは当然だ。20歳前後の若い兵士や優秀な大学生が学徒出陣し、順次爆弾を抱えて片道の燃料で敵艦隊に突入した若者は4500人余りだ。それまでは将来を担うエリートは駆り出さない方針だったが、予想以上に戦局が悪化したのだから。

戦後、あのようなむごい戦い方をしたことには非難や責任問題も発生したが、当時は振り返れば、あと5カ月も戦えば石油が枯渇するという事態だった。さらに軍艦や航空機も極度に消耗していた。そこで、起死回生の作戦として敵軍にとつて極めて恐ろしい攻撃を実施することで、負け戦ではなく、和平に入れることを期待した。しかし真珠湾への不意打ち攻撃に激怒していた米軍には、この和平作戦は通用しなかった。

いずれ終戦になれば、国の復興には若者の力が必要となる。そんな中、若い兵士から順次特攻に繰り出されたのには、どんな背景があるのだろうか。標的に向かつて飛

は20代と30代が最も多くなっている。65歳以上の感染は若者の10%程度だ。65歳以上の人口が若者の何倍も多いことを加味すれば、実質的な年配者の感染は若者の2%程度だろう。少子化が止まらない日本にとつて、仮に若者と年配者が同率であつても、将来の主役である若者を優先するべきだ。

私のワクチン一本を若者に回しても意味は無いかもしれないが、人生の先輩として接種は最後に受けようと思った。ところが当社の海外事業部長から「コロナが終息したら海外に出張してほしい。それにはワクチン接種の証明が必要」と言われ、かくして私は夏休み中に1回目の接種を終えたのだが。

接種の順位をさらに言えば自衛隊、病院関係者、警察、消防署、多くはないが国のために働いている国会議員、そして国のため、企業のために海外で就労している日本人を最優先すべきだ。また、東南アジアでは病院が少なく、その地で外国人である日本人が感染しても入院できないという現状がある。日本政府はある友好国に10

ぶだけであれば、60歳を越えた飛行士で十分であろう。心身ともに優れた若者ばかりを指名することに違和感を覚える。新兵にとつて上官の命令は絶対的であつたからなのか。あるいは人生の酸いも甘いも知って30歳以上となることにより、死に怖さを感じる年齢になつた上官のエゴだったのか…。

紆余曲折した東京2020オリンピックは大きな問題もなく無事に終わった。リオデジャネイロで取得したメダル41個を大きく上回り、58個を獲得した。ホームであることと競技内容の有利さを加味しても、日本の若者の体力と技能が向上している証拠だろう。ただし、大会中に起きた新型コロナ急増の原因は何だったのだろうか。

コロナの終息にはワクチン接種が最も期待できると言われている。私には4カ月前にワクチン接種の案内が届いた。案内を見れば65歳以上が優先となつてはいるが、これは絶対に間違つた判断だ。

感染者数やその内訳がテレビで連日発表されているが、高齢者の感染が多かつた当初と違い、今

分の危険を顧みず飛び込むだろう。戦時中、爆弾の落ちる音がすれば「子供だけは助かってほしい」と母親が子供にかぶさつたという話を、昔何度も聞いた。

世界と比較すれば、国は安定し平和ボケになつてもよい環境にあるが、人としてどうあるべきかを考える事例としてほしい。

0万本単位でワクチンを寄付した。それ自体はいいことであるが、「このワクチンをそちらに滞在している日本人に優先して接種してほしい」と依頼すべきだった。

### 未来を担う若者の命

特攻隊の人選に大きな違和感を覚えると述べたが、ワクチン接種の順番と特攻隊の人選は、全く逆にするのが正しいと思う。

海外から来日する旅行者に「日本人は心配りができる。おもてなしが素晴らしい」と言われるほど、日本は世界でも民度の高い国と知られている。しかし70年前も現在も、何かを忘れていた。

当局の考え方を正すことが先決であるが、年配者から大きな声で「若者に先に回してやれ」と言つてほしかった。国家の宝である若者も、自分の命に対して遠慮の必要はない。「ワクチンはわれわれ若者を優先してください。その代わりに国に大きな問題が発生すれば、先輩たちに代わつて頑張るから」と言えばよい。

子供が濁流に溺れば、親は自

### いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。

(社)日本金型工業会・副会長・国際委員長を歴任。中京大学特別栄誉客員教授、国立ソウル科学技術大学校名譽教授、神戸大学非常勤講師などを務めて後進の育成に寄与。2017年4月「旭日単光章」、21年1月「紺綬褒章」受章。著書に『モノづくりこそニッポンの砦』『ニッポンのスゴい親父力経営』『日本製造業の後退は天下の一大事』がある。

